東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

一斗内古墳群
里ノ内遺跡　概報

福島県文化財調査報告書第22集の６

昭和４５年３月

日本道路公団

福島県教育委員会

序

本県は、原始時代の遺跡はもち論、関東との接点に位置するところから、古代の遺跡が特に多く、われわれの祖先の生活文化を、如実に物語っています。

東北縦貫自動車道の建設が計画されるや、これら文化財の適正保存をはかるべく、昭和41年より分布調査を実施いたしました。これにより、極めて重要なものについては保存をはかり、記録保存すべきものについては更に予備調査を実施して資料を整え、最終的に50余カ所の遺跡を発掘調査することになりました。

本事業は、３年計画のもとに進め、本年度はその初年度にあたり、13の遺跡について８次にわたる発掘調査を実施し、予定通り終了をみてその調査概報を発行するはこびとなりました。もとより概報でありますので、不じゅうぶんなものではありますが、学術資料としてご活用いただれけば幸いです。

本調査に際し、ご多忙の中、発掘にあたられた調査員各位、郷土の文化財保存の熱意からご援助下さった協力者の方々、並びに調査の運営に、全面的ご協力を惜しまなかった市町村教育委員会をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭 和 ４ ５ 年 ３ 月

福 島 県 教 育 委 員 会 教 育 長

三　本　杉　　國　　雄

目　　次

1　地形および立地 …… 3

2　附近の遺跡 …… 3

3　発掘調査日誌 …… 3

4　調査の経過 …… 4

5　考　　察 …… 9

6　里の内遺跡について …… 11

凡　　例

1、この発掘調査は、日本道路公団と委託契約を結び県教育委員会が発掘調査を実施したものである。

2、概報なので、原則として実測図は付さず、出土品も未整理のものは省略した。

3、全体計画終了後、報告書として一括して刊行する予定である。

4、執筆は、担当者・調査員・参加者などが分担したものもある。図面・写真も同様である。

5、出土品は、県及び関係市町村教育委員会で保管している。

6、編集は、事務局職員が担当した。

遺　跡　名　　一斗内古墳群

　　里の内遺跡

所　在　地　　須賀川市越久字一斗内

　　須賀川市森宿字里内

調査期間　　昭和44年11月８日～20日

調査主体　　日本道路公団・福島県教育委員会

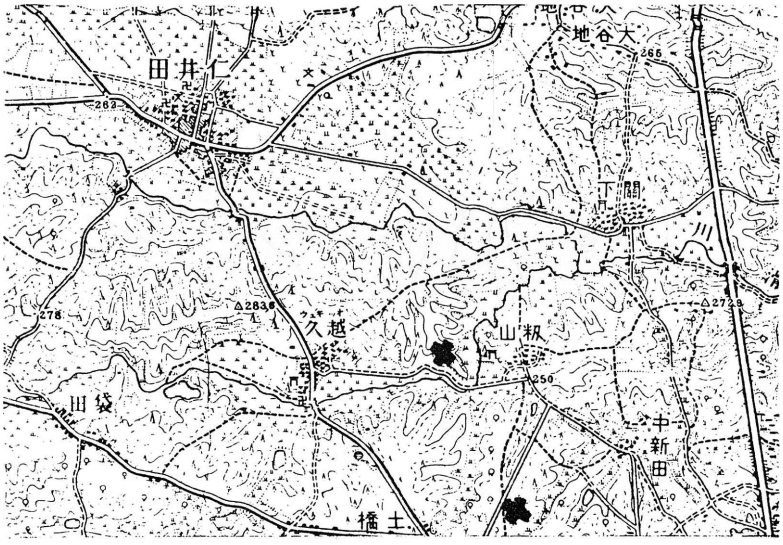
担　当　者　　梅　宮　　茂

調　査　員　　斎藤　誠、古川明、田中正能

協力機関　　須賀川市教育委員会

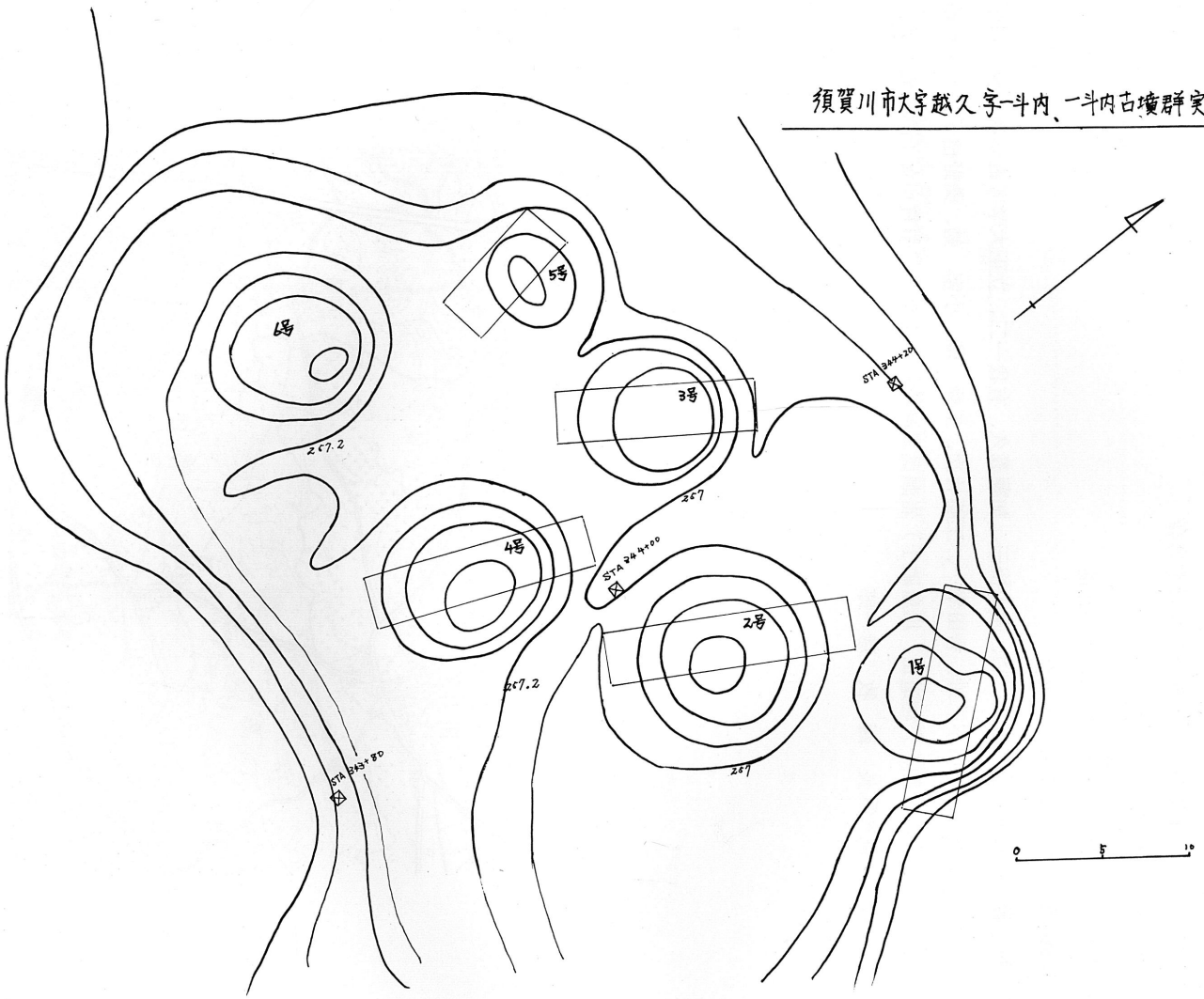
参　加　者　　永山倉造、渡辺　功、永山裕三、加藤義久、有我一二、立正大学考古学研究会（川原田典、桐田不二雄、吉田幸一、工藤竹次、工藤　肇、小室　勉、桑野信子、向田裕始中島　勲、大越道正、川島敏子）岩瀬農業高校社会クラブ、須賀川女子高歴史クラブ

協　力　者　　越久区長　西　牧　彦一郎



×印　上 一斗内古墳 ・ 下 里の内遺跡

須賀川市大字越久字一斗内、一斗内古墳群実測図



1　地形及び立地

須賀川、岩瀬地方の北西に広がる、洪積台地の南端で、阿武隈川の支流をなす滑川からさらに分かれた実取川の氾濫原を見下す、台地上に位置する。

2　附近の遺跡

古代・中世の会津街道の沿線と考えられている地域で、この時代の遺跡が、数多く分布している。史跡・上人壇廃寺、同じく史跡米山寺経塚など、附近には大きな遺跡がある。

長者屋敷跡、越久字福平にある土師散布地で伝説には福篦長者の屋敷があったといわれており、漆の固りが出土したと伝えられる。

延命池遺跡（全国遺跡地図番号1604）越久字延命池にあり、土師の散布地である。

四十壇古墳（1603）越久字四十壇にあった古墳群であるが、開田のため壊滅した。

籾山大壇古墳（追153）、森宿字籾山にある円墳。

関下窯跡（追156）仁井田字与六にあり、開田工事により破壊された、須恵器の登り窯であるが、事前に須恵の窯跡７基の発掘調査を行なっている。

籾山遺跡、一斗内の東500ｍ程の丘陵の土師散布地で、籾山部落に続く台地に発達している。

一斗内穴群、同一地内にある横穴古墳群であるが、その大部分は、村道工事の際破壊されており、開口しているものが２基認められるのみである。

里の内遺跡、土師、須恵の散布地であるが、あまり重要なものとはいえない。

仁井田阿弥陀遺跡、瓦、土師器、須恵器の散布地で、中世の板碑などもみられる。（永山倉造）

3　発掘調査日誌

昭和44年11月８日　土曜日　曇

午前中打合せ。午後１時より鎮魂祭、午後２時より立木伐採、刈払い。路線にかかるのは１号～５号であることを確認。１号～４号までの刈払い作業終了。調査員を５班に編成。

11月９日　日曜日　曇

平板測量レベル測量、ボーリング主体部探査。トレンチ設定、ベルコンで１号墳の排土作業開始。午後からベルコンを２号墳に移動して粗掘り続行。レベル測量は３号墳を除いて終了。

11月10日　月曜日　曇後晴

２号墳の排土作業、１号墳精査にかかる。10時休憩後ベルコンを４号墳に移動して粗掘り開始、２号墳の精査にかかる。３号墳のレベル測量。作業の進捗状況良好。

11月11日　火曜日　朝雨後晴後曇

ベルコンを５号墳に移動して表土の除去作業、他は精査を進める。道路公団より３名見学、市教委より３名陣中見舞、外に連日地元民見学。

11月12日　水曜日　曇

ベルコンを３号墳に移動して表土剝ぎ作業。１号墳のトレンチ拡張、４号墳はセクションを残して精査を進める。鉄片３点。刀子１点出土。市教育委員会より４名応援。

11月13日　木曜日　晴

１号～５号ともに粗掘り完了、各班とも精査に専念。縦横にセクションを残して掘り下げ作業。

1号墳に白色砂層発見。2号墳より鉄環出土、石室が明瞭になるにつれ活気にあふれる。見学者数名。

11月14日　金曜日　晴

各班とも石室内の精査を進める。2号墳で羨門部の松3本伐採。3号墳で閉塞石出土。4号墳で周溝発見、3号墳も同様。5号墳で刀子、鉄片出土。市職員4名応援。地元民数名見学。

11月15日　土曜日　晴

1号墳砂層の追求、トレンチ拡張、セクションをはずす。2号墳刀子出土、水糸を張り実測にかかる。3号墳石室精査。4号墳周溝四周に検出、直刀出土。5号墳鉄片出土、トレンチ拡張、南と北側に周溝検出、平板測量。市職員、公民館職員、地元民見学。高校生多数参加。

11月16日　日曜日　晴

1号墳石室内精査、トレンチ拡張続ける。刀子、金環出土、2号墳石室内精査、実測。3号墳石室内精査、直刀出土。4号墳実測作業。5号墳石室内精査、実測図作成。

今日は日曜日のため、岩瀬農高生、須賀川女子高生、多数が参加、作業は大いに進む。地元中学生、小学生、住民多数見学。

11月17日　月曜日　雨

昨夜来氷雨激しく冷え込む。10時まで待機。現場作業不能と判断、調査員、人夫共に西袋支所に集合して出土品整理と図面の整理にあたる。後阿武隈考古館（市体育館）において関連資料の調査を実施する。

11月18日　火曜日　曇

1号～5号まで石室内の精査と、プラン壁面の実測図作成を進めるが、意外と手間どる。各号とも周溝検出作業を実施する。地元民多数見学。

11月19日　水曜日　晴

1号～5号まで実測図作成作業に全力を注ぐが、側壁、敷石が細かく時間がかかり、あせりがつのる。1号墳より金環1個出土し、2個の対をなす。各石室の仕切りがあることが判明。ＦＴＶ取材。

11月20日　木曜日　曇

実測図作成作業を進める。壁面の実測が難渋し、結局1号と3号が未了となる。これについては永山と立正大生が奉仕で処理することに決定。暗くなるまでねばり一応全日程を終了した。

（鈴木啓）

4　調　査　の　経　過

1　号　墳

立木伐採、刈払いの後ボーリング探査を行なった結果、墳頂下約40～50㎝マイナーに、主体部の一部と考えられる石を確認。次いで3ｍ×13.6ｍN54°Wのトレンチを設定して発掘にかかる。表土を剝いだところで早くも主体部を構成している石が多数検出され、盗掘の際動かされたものと判断される。プランを追う作業を行なった結果、横穴式石室になると思われる。幅約1ｍでトレンチとほぼ同一方向であるが、羨門、奥壁は確認されない。

表土より—50㎝掘り下げて 石室の輪郭を確認、トレンチが若干ずれている。石室は横穴式石室で、長さ3.4ｍ、最大幅95㎝、ボーリングによれば深さ—50㎝、表土より床まで—80㎝で敷石を有することを確認、遺物の発見はまだ無い。石室の南側において検出されている石の散乱状態は、南へ2.60ｍ幅70㎝の範囲で見られるが、閉塞石とも考えられる。

石室東側壁の外法の確認のため、トレンチを表土より－50㎝掘り下げ南側に掘り進める。石室南側において石の散乱状態は、黒土層に散乱しており、東側トレンチの南にも黒土層の落ち込みが見られる。落ち込みより－75㎝で地山に達した。石室内精査の為の十字トレンチの水糸を張って調査を進める。

石室南部における石組みの精査、清掃と併行して北側石室外法検出作業を展開する。更にセクション用のグリットの西側面を、南北両グリットとも掘り下げる。南で－30㎝、北で－40㎝掘り進む。

トレンチ西壁で表土より－55㎝の下方に、木材カーボンを含む黒色砂混りの層が検出される。又西壁より90㎝の地点を中心に、長径１ｍ、短径60㎝の範囲で炭化材を含む白色砂層が検出されたが、厚さは両砂層とも不明。

石室内グリットを、南側－72㎝、北側－70㎝掘り下げ、南側においては敷石に達する。北側グリットは、あと10㎝程で床面敷石に達する。グリットの堆積土層中に、粘土ブロックが検出されている。又南側グリットにおいて敷石の上部＋10㎝程に粘土塊が検出されている。

石室内グリットの南北セクション図を取る（縦尺1：30)。東西のセクション用土手を残し、南北グリットとも東壁の追求のため東側に拡張して掘り下げる。西、東側石室外法確認の為、西側に拡張して－50㎝掘り下げる。

石室床面精査を進め、南側において東壁下より金環１個、中央部に刀子を発見する。北側において鉄鏃若干、刀子を検出する。南側における金環、刀子は出土位置記入、写真撮影後収納する。南北トレンチを延長して周溝を追うが未だ不明である。東、西側も同様である。

石室平面の実測を進める一方、北側トレンチで周溝の落ち込みを検出するが、立上りは不明である。又石室西側に検出された白色炭化物まじりの砂層は、石室の南側にのびている。範囲は不明である。平板実測を完了し、石室南部の閉塞石の内側で、床面より浮いた状態で金環を発見、先の金環と対をなすと思われる。石室の写真撮影後、石室両壁セクション実測、床面敷石の微細図を取る。

（立正大、桐田、小室、桑野）

２ 号 墳

トレンチ設定し鍬入れすると、墳丘上に主体部遺構の石であったろうと考えられる石（40㎝×30㎝、厚さ15㎝）２個が発見された。盗掘の際出たものと考えられる。トレンチの方位は63°Ｅである。表土を剝ぎ－10㎝ほどでほぼトレンチの方向に乗って主体部である横穴式石室の側石が確認される。しかしまだ羨門、奥壁は確認できない。石室の幅は約45㎝である。

粗掘りを進めた段階で、石室内は表土から—35㎝まで掘り下げ、ボーリングの結果床の敷石を確認し、あと－30㎝あることが判明した。石室の全長3.5ｍ、幅62㎝を算する。横穴式石室とみられるが、南側に攪乱部がある。

精査を進展させる都合上、石室内の土層セクションを観察する為に、石室の床面まで掘り下げ

る。まず石室内にN36°Wに主線をはる。これは西壁より10㎝の位置である。また西壁の一番北側の側壁の角から1.5ｍの位置に副線をとった。東側を掘り下げ主線より深さ35㎝で床面に達する。棺床面は径20㎝内外の川原石を用いて堅牢に組んであり、また副線より約２ｍの位置で敷石がなくなり、地山へと続く。

覆土の状態は黄褐色の砂質土で、ブロック状の黒色と灰色の２種の粘土が混入していた。多少の木炭も、径２㎜位の粒子状で観察できた。遺物としては、副線より1.5ｍ東壁より35㎝の位置の床面直上で、鉄環１箇が出土した。鉄環の径は３㎝を計り、さびがかなりひどく、環内面はさびによってうまり、収納の際半分に割れた。

副線より１ｍ以内の土を剝いだ結果、側壁は高さ30㎝、幅70㎝内外の板状の石材を使って構築していることがわかる。また、東西に周溝確認トレンチを設定。約20㎝の落ち込みが、東西両トレンチで観察できた。

石室内の精査を進めるため、西側に残していたセクションベルトに変化が見られなかったので取り払い、西壁の確認にかかる。西壁は、主線より2.1ｍまで４枚の板状石材を用いて構築してあり、４枚目の石より30㎝離れて、高さ70㎝、幅30㎝の石が残されていたが、これは恐らく盗掘の際動かされた側壁とみられる。遺物としては、副線より1.45ｍ、西壁より0.16ｍの位置で、切先を南に向けた刀子が一本、床面上に出土した。

写真撮影のため石室内の清掃をやり、南側石室内落石の平面図を作成する。次いでこの石を除去し、石室全体の清掃作業。遺物としては、石室西壁最南部付近で鉄環１箇が出土した。以上で精査作業を終え、石室プランの実測にかかり、中央トレンチ南側に平板をすえる。周溝トレンチも同時に図面に入れる。

石室壁面の実測、敷石の微細図を作成する。最後に石室断面図を作成して調査完了。

（立正大、向田、中島、大越）

３号墳

松木伐採、下刈りをすませ、ボーリングによる古墳主体部の探査をもとに、３ｍ×11.3ｍN48°Eのトレンチを設定する。ベルコンにより縄張り内の表土剝ぎ作業を進めるが、雑木の根がはりめぐらされ、思うように進捗しない。地表下10㎝で石室にあたる。

トレンチの南側端に黒色土の落ち込みが認められる。地表より深さ30㎝の石室の南端で、褐色砂層に混入した若干の木炭細片を検出した。トレンチ北端より中央へ38㎝の地点で、深さ30㎝より木炭細片若干出土する。石室を縦に分割するようにして、西壁より15㎝→20㎝の幅で、セクションベルトを設定。壁の構成は、大きい河原石を使用し、下部に下るに従って若干切石が認められる。セクション・ベルトを境にして、北は褐色土、南は腐植土に分かれている。

トレンチの南側において、深さ25㎝前後の地点より、黒色の腐植土が一面に観察される。砂質褐色土にネズミ色の粘土ブロックの混入が認められる。

石室の全長を確認する為に、トレンチを延長する。併せて石室全体のプランと周溝をつかむべく排土作業のピッチをあげる。セクションベルトより4.70ｍに付近において、黒色土の落ち込みを確認できた。また、セクションベルトより１ｍの付近に、１枚の閉塞が確認できた。また25㎝で少量

の木炭が認められた。

トレンチ中央やや北寄りに、細かい白砂がブロック状に検出され、この中に粉末状の木炭らしいものが検出された。石室の周囲に相当量のネズミ色の粘土がみられた。これらは石室構築の際に、いわば石と石の接着の目的をもって、すべり止めしたものであろう。この補強の手法は、他にも共通している。石室内にも若干粘土ブロックの混入がみられた。これは、石室上部の落ち込みによるものか。全般的に石室内に充填されている土は、比較的微粒の褐色土である。

西側の周溝確認のため、小トレンチを設定した。周溝の外方30㎝の所から、まとまって縄文土器片（前期前半）が、ローム層に５→10㎝食い込んで出土した。ロームは褐色で比較的やわらかく、攪乱の形跡はないようである。セクション・ベルトの取り払いをする。石室内における層位は、全般的に一層で、堆積層の変化は認められず、褐色砂質土である。石室の南端には落ち込み石が少々見られ黒色土が若干あった。

トレンチの延長および小トレンチの設定により、東、南、西で周溝を確認した。

石室内精査作業を進めた結果、石室南端石の落ち込みの所で、床面から釘らしい鉄製品の細片が検出され、かつて木棺かまたは何らかの木製品が埋没されたことを示唆する。副葬品は、石室北側の隅両壁にまとまって出土した。北の東壁にぴったり接して直刀が発見され、同じく西壁下に刀子及び鉄片が発見された。何れも床面直上に検出された。刀子は北の四壁に接して２本、これと直角に北壁から30㎝離れて、それと平行して１本出土している。石室内の精査を終了して、南側の落ち込み石を除去し、平板によるプラン測量、壁面、床面、縦横の断面図作成にかかる。

（立正大　吉田、工藤、川島）

４　号 墳

３ｍ×13.5ｍ N68Eのトレンチを設定して、表土の除去作業を実施する。古墳主体部は完全にトレンチ内に納まっている。墳丘下部に黒色土の落ち込みを発見するが、今の段階では周溝と断定はできない。

主体部の石室内に落ち込んでいる土砂を、十字にセクションベルトを残して排除する。これを室底まで掘り下げると、敷石も確認された。奥壁については石が取り除かれており、現段階では粘土を確認したにとどまる。

落ち込み確認のため、トレンチを延長して表土を剝ぐ、この結果西側に確実に落ち込みが確認できた。西側主体部では、閉鎖石と思われる岩石があり、敷石を南へ追って最後に確認できた敷石より一段高く設置している。これは玄門にあたる部分と思われる。西側主体部を完掘する。石室内の土色は赤褐色で、さらに西側においては黒褐色に変る。出土遺物はいずれも鉄製品で、敷石直上より発見され、完形鉄鏃１、先端部の欠損した鉄鏃１、棒状鉄鏃１、鉄製品数点等である。

石室東側を床面まで掘り下げて精査を進める。西側と中央では密に敷き詰めてある敷石が、奥壁に近い部分では人為的攪乱のためか無かった。奥壁の石もないが、砂質性土と粘土が残存している。出土遺物はなかった。

主体部プランを、より明確にする為、北西部を幅約80㎝で掘り下げる。西側に延びる落ち込みが確認できた。同様な目的で主体部南西部も掘ったが、北西部の場合と同じ落ち込みの上に石が多く

残存していた。

主体部の清掃を進め、石室の石組みの状態をより明確にする為に、削れる土はできるだけ削ったが、石の間には粘土が詰められていることが多かった。周溝確認の主体部西北部を拡張、深さ26㎝の所で幅2.10ｍの黒色を呈した土層の周溝を確認できた。

更に周溝確認の為、主体部に対し直角にトレンチを設け、約1.30㎝の周溝を確認した。

石室内に充填している土の堆積状況を子細に観察しても、層位の分離は不可能で、単一層であることが明らかなので、セクションを取る意味がない。そこで掘り下げ作業を進めた結果、石室内の北側壁で長さ37㎝の、先端より15㎝のところで折れ、鞘尻が若干残存する直刀を発見した。

主体部西側のセクション・ベルトを完掘する。この部分では西に延びる落ち込みがあり、そこに石室と同じ幅の粘土帯が、ローム面にくい込んでいる事実が確認された。

閉鎖石の状態を明確にさせる為の清掃、および敷石の一部を清掃した。敷石は、奥壁設置想定位置より約２ｍの所で、攪乱の為無くなっている。平板を据え石室の実測を行なう。石室両壁のセクションをとり、主体部周辺の清掃、周溝確認トレンチの測量を行なう。

実測図作成終了後、玄門部にて一段高くなっている部分の石を除去した結果、閉鎖石の部分より南の方へ、数拾センチ下った所まで敷石を設置している事実を確認できた。更にその先は３→５㎝程の厚さで粘土が張ってあることも確認した。

石室の敷石を清掃し、微細図をとって終了した。　　（立正大　川原・工藤）

５　号　墳

３ｍ×７ｍのトレンチ(1)を設定する。マウンドは、高さ45㎝、径492㎝と低い。粗掘りを進めると、表土層15㎝、黄褐色土層27㎝、それ以下は地山層となっていることが判明した。周溝と思われるくぼみは、黒色土層の落ち込みによって認められたが、これは表土層と黄褐色土層の中間に存在している。

石室構築に用いられた石塊群は、その上部を表面上に露出しているといったような状況であった。これらの石塊の岩石は、本古墳群の存在する丘陵にあるものを用いたものと思われる。玄室と思われる部分は、北々西端に存在している。しかしその反対側の南々東一帯には、数多くの石塊が不規側に累積していたが、これらの石塊群が何を意味しているのか判断しかねるような状況であった。石室の遺構についていえば、玄室と思われる部分の発掘作業を行なった結果、側壁部分は東西ともかなり大きな石塊を用い、整然と構築されていた。これらの石塊は玄室の床面にいたるほど大きなものが用いられていることが確認された。１号→４号墳にあっては、床面の敷石部分がいち早く確認され、比較的薄い丸みのある石が整然を敷詰められた状態で調査できたが、５号墳では中央部に床の敷石を欠き、その確認が困難視されるような状態であった。次いで奥壁部分を調査したが、１枚石を設置したのではなく、側壁と同様の方法で、しかも側壁の石塊より小さいものによって構築されていることが確認された。南々東一帯に存在する石塊群を、玄室の部分との関係を追求するために除去したところ、側壁が玄室から整然と連続しており、東側壁に石塊の崩落が一部認められるが、とにかくしっかりと構築されていた。しかも玄室の部分との境界を、明確に示すために薄い板状の石２枚が埋め立てられていることが確認された。境界の南側には、敷石部分らしいもの

の存在は、ついに確認することはできなかった。

表土より石室床までの深さは、84cm→90cm程度と測定された。出土品は、玄室中央部より長さ8cm、幅2cmで先端の尖った鉄製品が出土したにすぎない。

この古墳主体部を見た場合、その構築方法にきわめて特異な点があることに気がつく。すなわち、封土と石室の深さを考えてみると、封土の高さ45cm程度であるのに対し、床面敷石部分までの深さが、84→90cm程度に達しているということは、表土層、黄褐色土層などの封土だけでなく、地山層をも掘り下げていることを示す。(2)さらに玄室と羨道を仕切る板石の存在が確認されている以上、この石室の性質をどう解釈するか迷わざるを得ない。すなわち、封土が低く床面敷石部分のほとんどが除去され、遺物の出土が少ない点から、何時の世にか盗掘されたものと思われるが、残された遺構からみて、竪穴式石室とするか横穴式石室とみるか、判断しがたいところである。何故なら、地山層まで掘り下げて構築された横穴式石室というのは、類例は少ないが無い訳ではない。(3)更に1号→4号墳においても同様の板状の仕切り石の存在が認められている。しかし、だからといって本古墳群の石室の性質を、横穴式石室であると判断するには、あまりにも地山土層を掘り下げている点疑問が残る。

何れにしても、本古墳群の石室は、5号墳も含めて他の類例をみてから判断したいと思う。

(1) のちに65cm程度南に延長された。

(2) 1号墳の場合特に顕著である。

(3) 安達郡大玉村の、六社山古墳群中の一基を、伊東信雄教授と共に調査した例がある。

（渡辺　功）

5 考　　察

一斗内古墳群は、封土が浅く石室の上表部が露出しているような、小さな円墳群で1号墳と2号墳の如きは周濠が相接するほど、近接して群存している。

5号墳は径5mのマウンドに対して4mにわたって石室の被覆石が散乱し、両端の石は周濠に臨んでいる。これは盗掘によってであろうが被覆している土質からみて、或る時期に相当期間石室の1部が露出していたことを物語っている。

4号墳の石室は奥壁が破壊されているが、推定して5m、マウンドの径11mに比して長大な石室である。石室の主軸方向は1号墳のみ東西であるが、他は南北である。

「石室の構造」

1号墳の主体部は、主軸方位が異なるのみでなく、石室の構造も他と若干相違している。幅平均1m長さ4m深さ80cmで、地山を掘って大きな方形の石を据え、上層には割石を小口積みとし、西部の奥石は本古墳群中最も大きな1枚石を使用している。これに対して入口とみられる東部には乱石がつみ重ねられている。

他の4基は、石室の幅がせまく、深さは1号墳の半分にも満たない程浅い。側壁の構造は各墳によって若干の相違はあるが、地山を掘って最も下方に大きな石を据え、その上に割石をつみ積ね、粘土をもって間隙を充塡している。各基とも底部に平板な石をもって敷石としている。この形式を一見すると竪穴式石室を思わせる。特に石室の狭少な2、3、5号墳はそうである。

ところが、各墳とも奥壁と反対側、つまり羨道とみられる箇所には大小の乱石がつみ重ねられている。これを除くと玄室との境に平石をたてて間仕切りとし、一見副室の如き一室を構成している。この部分は敷石があるのとないものがあるが、敷石のあるものの敷き方は不揃いで雑であり、4号墳の如きはしだいに上にそり上り1号墳のこの部分は羨道を思わせる。しかもここには副葬品がない。

側壁の上部は平たい石を並べ、2号と4号墳はその上を白灰色の粘土で覆っている。側壁の上端で、ここに蓋の存在が考えられるが、普通の横穴式石室や竪穴式石室なら平板な蓋石が数枚あるはずであるが、その破片すら5基の石室にはいずれも存在していない。この附近は石材採石地で、平板に割れ、加工しやすい石がたくさんある。また側壁や奥石には、鉄斧（ちょうな）は使用していないが、方形に加工したようなものを下層に使用している。従って本古墳群はいづれも蓋石を使用しない古墳のようである。石製の蓋はないが、有機質の、例えば木製の蓋はあっても差支えないか、その証はない。

以上のべたように、本古墳群の石室は、1号墳は蓋石がなく、奥石も巨大なものではなく、また本格的な羨道は構成していないが、5基共にこの箇所に乱石が積み上げられているのは入口の閉塞施設とみられ基本的には横穴式石室の系統に属するものとみられ、他の4基はこれらがさらに変化し、石室の幅は細く、浅くなり、副室を有する竪穴式石室を思わせるが、1号と比較してみると、やはり横穴式石室がさらに退化したものとみられる。特に基石がないので、仮に「無基石横穴式様石室」または「擬竪穴様無蓋石細型石室」と命名しておく。

次に埋葬法を考えてみると、横穴式石室の系譜につながる石室とするなら、あらかじめ構築した石室内に、羨道を通って、棺か或は直葬して副葬品を供えるのであるが、蓋石のない、天井の低い、羨道が変形している本石室においては、石室内に遺体を埋葬し、少量の直刀、刀子、鉄鏃、などを副葬した上に、当初から土を充塡した形跡がある。このことは石室内に充満している土砂には層の変化がみられないからである。3号墳からは、鉄釘の如きものがあるので、直葬ではなく、木棺の如きものに納めて安置し、石室一ぱい土で覆い木製の如き蓋をなし、その上にあまり厚葬でない封土を盛ったように見える。追葬の形跡はない。なお石室の周囲に河砂をまき散らした形跡がある。砂は黒い雲母質をふくみ遠く離れた阿武隈の川砂をもってきて撒いたものとみられる。

大平洋岸の地方例えば真野古墳第21号や小池古墳の例の如く、海砂を石槨の上に（周囲に）まき散らしたような、うすい層位があるが、これと同義の埋葬品を講じたものと想定される。

副葬品

副葬品は少ない。1号墳より金銅耳環と刀子、他よりは直刀、刀子、鉄鏃が出土している。直刀は長大なものはなく、茎と刀子の区別がない造りにはわらび手刀に通ずるものがあり、鉄鏃は鉄板を打ち抜いて造りかえりのある扁平な無柄式である。

この種のものは相馬郡鹿島町大窪横穴から出土している。時代の標式となる土器は一片も出土していない。学童によって附近から土師器の破片が採集されているが、その地点は確認されないが、長胴式の土師器甕が出土しているので、時代の下降するものである。ただし、この土師器と本古墳が関連があるかどうかは確認されていない。

一斗内古墳の時期

本古墳は時期を示す資料は何もない。しかし石室は一見竪穴式に見えるものであるが、1号墳がさらに退化したものとみられるので、「擬竪穴様無蓋石細型石室」または「無蓋石横穴式様石室」の仮称の如く、横穴式石室が退化したものと見られ、出土品のうち短い直刀、扁平鉄鏃等から類推すると、既に横穴が構築された時期の円墳とみられ、積極的な証左はないが8世記前後頃の小円墳群とみて大きな誤りはないものと思われる。

詳細については、本報告書を参照されたい。　（梅宮　茂）

6　里の内遺跡

地形・立地

この辺一帯は、赤土のローム層の台地で、須賀川から仁井田に通ずる県道を北に入った所である。通称吉美根開墾と呼ばれており、主として戦後の入植者が多い。この開墾の際、土器が出土したといわれるが、現物は無く、一帯に土師・須恵の破片が見られるが、散布は薄い。

調査の概要

土器の散布が最も多い小松肥料店裏（北側）畑と連続する山林と空地にトレンチ2m×15mを入れたが、表土には3点の破片が発見されたにすぎない。40cm下の地山と考えられる赤土層からは、遺構は発見されず、道路敷には遺構はのびていないのではないかと考えられる。

ここから100m北側にある畑に、1m×1mのトレンチ3本を入れたが、地山の赤土層には、遺構は発見されなかった。

出　土　品

土師器の破片で、器形の判別できるものはなく、薄手のものである。

皿の底部と思われる糸切底のものが一点みられただけである。

須恵器はいずれも破片のみで、薄手のものばかりである。青海波文のたたき文のみられるもの2点が発見された。　（永山倉造）

1　　号　　墳

2　　号　　墳

3　　号　　墳

3　号　墳

4　号　墳

発　掘　調　査　状　況

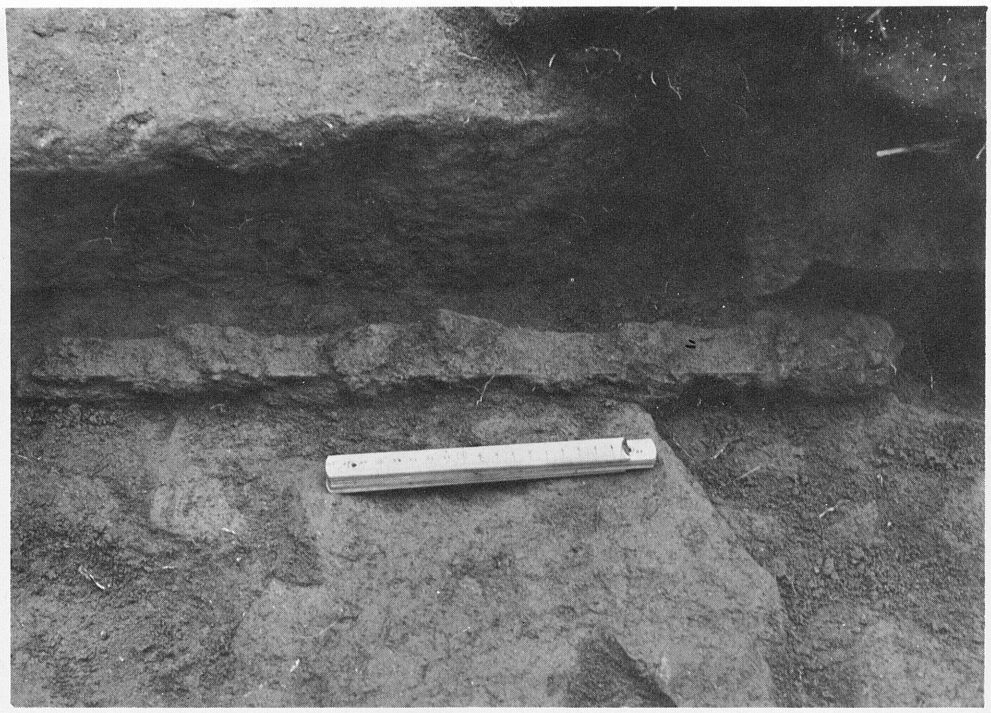
1 号 墳 石 室

2 号 墳 石 室

3 号 墳 石 室

4 号 墳 石 室

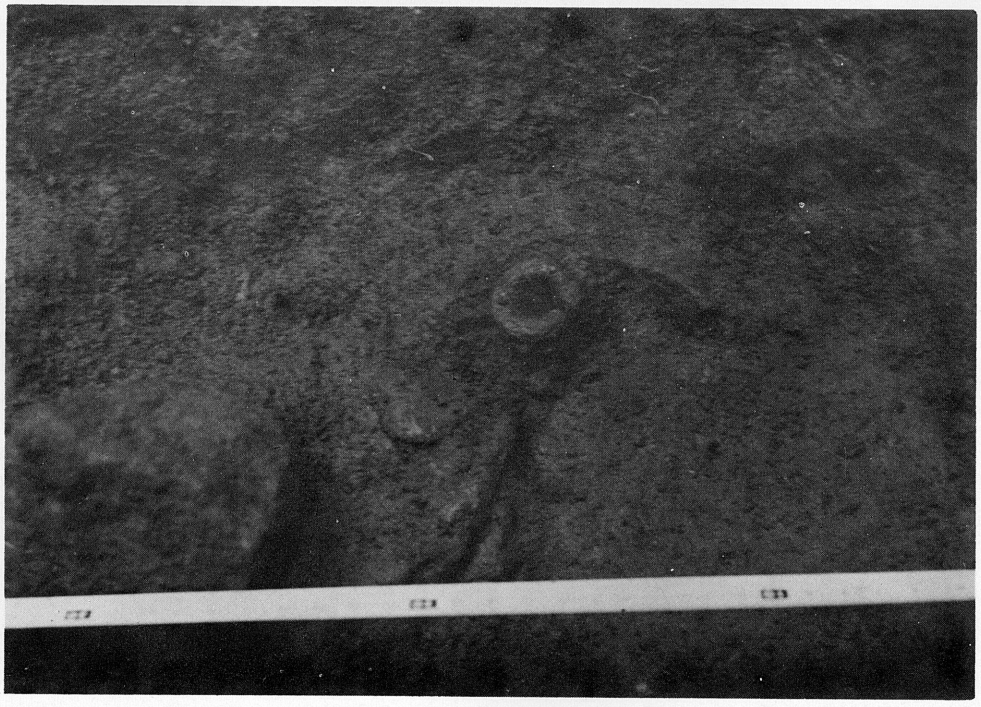
5 号 墳 石 室



3 号 墳　直刀出土状況

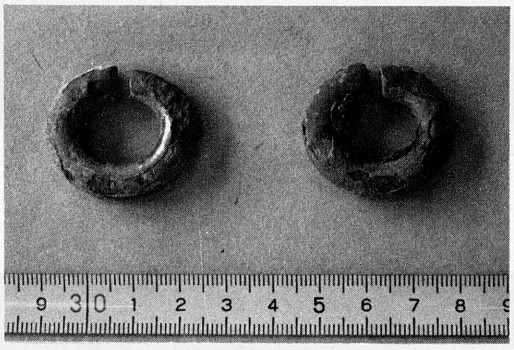
4 号 墳　直刀出土状況

1 号 墳　金 環 出 土 状 況



同　上

直　刀　　上4号墳・下3号墳出土



金　環　1号墳出　土

鉄　鏃　4号墳出　土

鉄　環　2号墳出　土

刀子　4号墳出土

同　上

同　上

里の内遺跡　トレンチ

昭和45年3月15日印刷
昭和45年3月31日発行

福島県教育庁社会教育課
福島市杉妻町2—16

印刷　小浜印刷株式会社
福島市陣場町9—3